



岐蘇林

目次

▲研究
製炭法の研究

▲文苑

稽程一千日
夏の中禪寺より

飯田まで

小品四篇

歸郷の記

富士山

修學旅行記

▲雜報

學校記事
其他

日十月七年二十四拾明 (日五廿月每定) 號 拾 七 第 日五十二月八年四正大

研究

製炭法の研究 (承前)

北村正夫

其九 製炭事業改良法の要點

校友諸君……産業の改良と云ふことは今や一種の流行の様になつて居るが惡病などの流行と違ひ斯様な流行は先づ結構なこと、云はねばならぬが世間には此改良と云ふ立派な名で盛んに改悪が行はれて夫れがために却て産業の衰頽を來した例もあるから改良の濫行は大に慎まねばならぬ。殊に長年の歴史を有する産業の改良をなすには先づ過去の沿革と現在の状況を詳細に調査し將來改良を要すべき事項と其必要の程度とを研究した上改良の方針を定めて實行する様にせねばならぬと思ふ。

ここで話しは元へ返るが一體改良と云ふとは現在よりも善良なる物に改めるとである例へば衣服の片袖を上等にするも亦一種の改良と云ふとは出来るが然し夫れは片袖に對する改良であつて衣服全體から云へば却て改悪となるがある。然るに世間には此片袖に對する改良と衣服全體に對する改良とを混同して馬鹿な失敗をやる者が多い。即ち製炭の改良に於ても唯上等の木炭を製

造する様に改良した丈で價格も高く製炭者の利益も増さない様では所謂片袖的の改良であつて製炭者も需用者も一向に有り難くないのである。然るに製炭事業は製造工業の一種であるから製造と云ふ半面に販賣と云ふことがある故に製炭事業の改良をなすには製炭者の希望を満足せしむると共に需用者の希望にも添ふ様にせなければならぬ即ち需用者は上等の木炭を成るべく廉價に供給せらるゝことを望み製炭者は製造するにも販賣するにも成るべく手數と費用を多く要しないで純収益は成るべく多いことを希望するのである。此違つた兩方の希望を満足せしむべき方法でなければ製炭事業全體に對する眞の改良法と云ふとは出来ない然らば此希望に添ふ様にするには在來の製炭法に對し如何なる點を改良すれば宜しきか僕は次の六項を以て此の問題を解決することが出来ると思ふ。

- 一、産業率(炭材に對する産出木炭の割合)を増加すること
- 二、製炭費(設備の消却費、炭材の採得費、人夫賃、及雜費等)を節減する事
- 三、不用物として廢棄せられつゝあるもの(炭室の烟、熱、枯木、枝木、灰等)を利用して副収入を得ること
- 四、炭材の性質と需用者の希望とに適應する様に製炭をなすこと
- 五、製炭の設備及方法を簡單容易ならし

六、俵装を改良し運搬及販賣法を簡單有利ならしむること

第一項は収量の増加第二項は生産費の節減第三項は副収入を擧ぐることで専ら經濟上の改良點である。即ち木炭の収量を増加した上に副収入を得一方では生産費を少くするのであるから此三つの改良をなせば木炭を廉價に賣つて需用者の希望に添ふと共に製炭者も亦純収益を増加することが出来る次に第四項は廣い意味に於ける品質改良である(從來の様に唯無暗に上等の炭質に改良すると云ふ意味ではない)即ち炭材には堅軟大小等種々の性質があつて夫々の性質に適應した製炭法がある又社會の需用も其用途により種々の木炭を希望するのであるから炭材の性質と需用者の希望に適應する様に製炭法を改良するのである。

第五項は改良法の普及を容易ならしむるためである。即ち如何に完全なる製炭法でも廣大な設備を要し其製炭の方法が複雑であつては遠き將來は兎も角も現今の有様では到底之れを普及せしむることは出来ない。我國でも專賣許可を受けた製炭法もあるがまだ廣く民間では行はれて居ない様である之れは方法が悪いのではない其設備と方法が簡單でないためであると思ふ。故に其設備も方法も在來法と余りかけ離れない簡單容易なものたるが必要である。

第六項は製品の販賣を成るべく經濟的ならしむる様に改良することで運搬中に破損、漏失のない様にし又販賣するにも餘り手数料が掛らずに高價に賣ることの出来る様に改良するのである。

以上の六項が改良せらるゝ事となれば需用者も希望通りに上等の木炭を廉價に求むることが出来製炭者も從來より手数料が省けて利益が多くなり茲に初めて眞に理想通りの製炭事業が經營せらるゝこととなる。

其十 北村式八德製炭法

校友諸君……昔から七轉八起と云ふことがあるが面白いものだ。幾度か失敗の深い穴に落込で居た。僕は又少しく前途に光明を見出して來た。

僕は前に述べた製炭事業改良上の六要點の内第一項から第五項迄各項に就て(第六項は製炭法には直接の關係なく製品の運搬及販賣に關するものなく)在來の製炭法に改良を加へた結果兎も角も八つの得點を有する製炭法を案出して之を八德製炭法と命名することにした。無論まだ理想通りのものではない或は亦相變らず失敗に終るものかも知れぬが一昨年からの實驗の結果では檜崎式や自動式よりは比較的面白ひ様に思ふので次に其大要を記することにしよう。

(一) 八つの得點

賣藥の能書の様効能を列擧するならば二十もあろうが二十德製炭法と云ふも變た

炭竈から空中に空しく飛散せらるゝ煙を冷却して木醋液を採集し之れより醋酸石灰を製造して副収入を擧げる。然し從來行はれて居る方法では大に技術を要し熟練しない内は製炭の方に影響を蒙つて炭化日數が長くなり或は炭質を損じ或は収量が少くなる等の失敗を來し差引すれば却て損失となることがあるために未だ此の副産物利用が普及しないのである。然るに此八德製炭法には全く此の缺點がなく如何に經驗のないものでも決して失敗する恐れはない無論製炭の方には何等の影響も受けないのである

4、廢熱及不用の木材を利用す 製炭及醋酸製造のときは其煙突から空しく空中に放散する熱量は頗る多量であつて之を金錢に換算したなら少なからざる額に達するであらう。之れは前に(其五)で述べた所であるが炭竈の大師穴から放散する熱を利用して自動的に製炭をなす考案は不幸にして失敗し未だ良法が見當らないが茲では醋酸石灰を製造する室の煙突から發散する熱を利用して炭竈内に導き其熱によつて炭材に點火をなさしめ之れを炭化せしむるのである。又炭竈の中から發散する熱を利用して半乾の醋酸石灰を乾燥すれば手數もかゝらず高熱のために醋酸石の分解する恐れもない一舉兩得の良法である。尙此等に用ゆる燃料は炭材に使用すること出來ず從來は空しく廢棄せられ居た細木や不良木を利

用するのである。 5、老人及婦女子の勞力を利用す 所謂炭燒でも親もあれば妻子もある然るに製炭の仕事は多くは腕力を要するものであるから老人や子供では手傳ひが出來ぬが此八德製炭法では炭材の伐採と炭材の詰替へ以外の仕事は總て老人婦女子の勞力を利用することが出来る。従て從來は山中の炭小屋に寂寞なる獨居生活をして居たが此の改良法の徳により家族生活を營むことが出來大に慰藉も得ることが出来る。此點は簡單な經濟上の改良のみではない重大なる人生問題に關した改良點である。

6、木炭の品質を善良ならしむ

此方法では冷たい空氣を直接に竈内に入れて徐々に主として熱した炭酸瓦斯を入れて徐々に炭化せしむるのであるから炭材は本末同様に炭化することが出来るから炭質の良好なるは理論上から云ふて當然のことである。

7、設備簡單にして方法容易なり

炭竈も在來のもので差支へはない(新しく築造するとしても在來のものを少しく改良しただけであるから甚だ簡單である)唯木醋液採集装置は少し面倒であるが之れとて從來各地に行はれて居るものに一部の改良を加へて出て在來のものよりも取扱ひを簡便にしたのである又製炭中の取扱に及發煙等の加減も在來の方法と殆んど大差なく極めて容易である。

8、炭化の日數著しく短縮す

在來の方法に比すれば炭化を要する日數が著しく短くなる例へば一丈竈では在來法によれば四日乃至五日を要するが此の方法では三日乃至四日で完全に炭化する若し火氣の通ずる孔を廣くして多量の火氣を入れるときは更に其日數を短縮することが出来るが然し其爲めに多少炭質を損することがある。

文苑

警程一千日 (一六)

秋山の一夕 高 穂 生

トローが紅塵裡より遁れて三十年間只粗野なる農夫と親しみ清き泉と小鳥の囀舌に籠る造化の神の囁きとの間に筆に委せたる『森林生活』を通讀して僕は己の思想の總てが餘りに形而下なる打算に出でざるを嘆ずるや久し 大正四年六七月の候下高井郡秋山なる信山の別天地に宿望生活の一部を遂げ得たるは

一生の幸福と密かに ぶ所なり
秋山は本郡の最北端なる堺村に在りて信越上州三國の境界に接し地勢上風習上全く信州にはあらず俗に云ふ秋山は中津川の上流狭隘なる谿間三里半の間に寂しく散在せる五部落七十戸にして往古より此地に山越しするは佐渡が島へ島流しせらるゝと等しく涙に水盃を交はせし昔話の今尙首肯せらるゝは誰人も同一なるべし
七月九日夜「和山湯泉泊り」之れ豫てのプログラムなり、更衣と鐘詰とを脊負へる頑健なる人夫は宿舎を出で、目的地指して急ぎしは早朝の事なり陸地の大部分が森林なりし時代の名残を留むるブナ、ナラ、トチ等の深林中とツヅラ織なせる細路を木曾美林の話などして四名の一行が飽く迄翠色にしみ掬手するには惜しき泉水に咽を潤しつゝ水色瑩徹の状へ山容の雄大なるを稱しつゝ夕六時今日の行程を果したるなり
秋山の外観は想像とは餘りに隔たらず住民は言葉こそ風貌こそ異なれ完全に發育せる体軀を持つ
和山部落は三戸より成る南方三國峠より來る中津川は脚下、數十仞の下緑葉の間に隠現西下し流水の餘韻爛々たり温泉宿は草葺六間に八間許りの二階建てに浴室と云ふは飛石位ひの二十坪内外の板壁作りの暗室なり、郵便物は八里を隔つる下水内郡なる森局より五日目に配達せられ、長野市の新聞

は發行の日より七八日を経て到達すれども隣り切欠部落の永代配達區外地に比すれば文明の恩澤蓋し計り知るべからず、此の別天地の一夕は多忙なる現社會とは全く没交渉なり、たとへば全世界の平和破れて我國を圍む如き事ありとて此奥深き谷間のみは和平にして夢いともまごかなり、弊鞋を捨てたる泥足を濼がで上る事は寧ろ此家には當然なり……と云ふは床板の代用に八十年來積み上げし敷草を以てし其上をチヨムシロにて蔽へるが恰も護謄紙の上をゆく如くステツブ毎に六七寸許も凹めるは他にでは見られぬ圖なるに見ても略推察せらる飾氣なき八十六才の老婆の爐側より火箸にて指示せる階上にと煤煙に染みたる階段を摸索しつゝ八疊敷なる暗き陋室の主人とはなれり
一生をチヨムシロの上に暮す秋山住民のチヨミの上を客を宿らしむるの氣遣ふ所にあらざるは言ふ迄もなし片隅の板敷とせる一疊敷には大小のカケ鍋、鐵瓶の如きもの取り亂せり我室を圍む土壁は漆の如く浴衣のアチコチ掌大の黒斑を作りしは又好記念ならん
越後方面より稗餅を荷ひ來る木チン紳士の御客様も常に有る様なれど此家の蚤は未迫害を加へられし事なき面地にて人を恐るゝ摸樣なく聲の落ち付くと同時に早や三四疋腹背を昇降せり蚊軍は口吻峻烈なれども幸

にも一度出入の板戸を押せば重く籠れる黒煙濛々として押し入り流石の猛者も手輕に放逐し得らる天も茲に到れば同情淺からぬ也稗餅餅大根干の味噌汁味噌漬大根の珍肴越後の五等米に二ヶ月越のカビ茶、夫れも役人が富豪にあらねば口にせずとは年に二回の外米食せざる彼等には寧ろ當然なり斯く谷中第一の御馳走に夕食も濟めば疲勞と蚤と蚊と煙と十分の一燭光にも及ばぬ。メラランプの光と雑多の光景に惑亂せらるゝのみにて最早吾が處すべき術は薄く短き惡臭の籠る夜具の上に横臥するの外見當らず此夜の慕仙的ライフの間に於ける我が牙切つたる頭腦にはドロの森林生活が目前に髣髴として人生幾多の迂餘曲折が夫より夫と切りも無く思想せられて靜かにふけゆく秋山の一夕は睡眠僅かに一時間にして明け放れたり
河水の海に流れ込みて水嵩の増さるるを第一の不可思議とせる可憐なる彼等が若し人權を口にし國政を云爲するの時期至らば我國運の果して如何あるべきを想見せられて轉々忍び難きなり(七月廿五日新潟市にて)

夏の中禪寺より

越 畔 山 人

夏は中禪寺の生命であると今更いふだけ遅い、青山、白帆、緑水、赤い鳥居あゝ何と云ふ自然のハ、モニーであらう。南は歌ヶ

濱から寺ヶ崎へ、北は男体山麓の大崎からフルマキへかけて一帯に檜、栂、白樺の喬林の間に三々五々ホワイハウスが見ゆる湖畔に沿ふ湯本街道は百五十―二百年生の老木が參差として枝を交へ晝尙暑さを覺わぬ夕暮になれば白人の群がゾロゾロと散歩に出かけ恰度スキヌのゼネバ湖畔が忍ばれる
男体山は梅抜八千尺遙かに關東平野を瞰下すべく晴れたる日には遠く富士や淺間も望まれると云ふ植物帯は主としてモミ、ツガ類である對數曲線で表はさるゝといふ火山共通の富士額を持つて居る
湖上に此山を仰ぐものは皆其森林美に醉はされる波靜かなる月の夕此偉大なる自然の沈黙はいかに詩人をして泣かしめよう
中禪寺湖は又の名を幸の湖といふ行幸の御跡を戀しい、東西三里南北一里周圍五、〇九里海面高千三百米突の男性的山中の湖、湯川砥山澤、柳澤の三川は西北より注ぎ入り東の大谷川は唯一の吐口となつて居る、其大尻の流を下る數丁、大絶壁七十五丈を飛下する壯觀は直ちに天下のカトラクト華嚴と知れ湖中に二つとない上野島は周圍僅かに一丁に満たないが奇石珍木に富むとか昔榛名山と男体山とが喧嘩をして男体山が勝つて取つたものと云ふ神秘的な傳説もある、夫れに就いて聯想止まぬは戰場ヶ原の由來である島の東方に百七十二米といふ

湖中第一の深所がある近頃又うらやみよりも深い所が発見されたといふが眞偽は分らぬ水の清さも又稀に見る所で湖沼學研究家田中子爵の實驗によれば十八―二十米の透明度を有し「フォレル」の標準液第三號に當るうである、三角帆のヨットやモーターの音勇ましいボートの縦横に走せ交ふ様は夏といふシーズンを頭に浮ばせるさりとて最高七十二度位の水温では水泳も危険と云はねばならぬ。然し琵琶湖に鍛へたKさんと日本海に生れた山人はどうして脾肉の嘆に堪へよう御料局養魚場の舟に打ち乗りて時たまヒメマスや、ニジマスの御仲間入りをするのである、湖では屢氣樓も現はれるといふ。今は二荒山の男子登拜期で關東平野から集ひ來る白衣の人々は時ならぬ賑ひを呈して居る。

飯田まで

旅 狂 生

ゆかり君!
晴れたる朝淡い殘星が一つまたたきする間に一つ又一つと消れ去て玉の露が稻の葉末よりボタリ／＼と落ちました葉月の一日に思立た信州縦斷の第一歩を高く強く寄宿の前庭に踏み付けて一行五人拾の足は停車場へと進みました
五時五十分發名古屋行の列車に身を乗せました眞黒に茂れる城山御料林板屋根續きの

福嶋町を煙と共に残して碧水藍を流せるが如き木曾川に沿うて上松須原野尻を経て三留野に下車したのが七時頃でした。
ゆかり君! 大平峠拾一里と聞いた時は此の足で拾一里とんとんと膝打をして見ました眞夏のコバルト色した空に白雲が悠々南へ南へ流れて賤母御料林に消れ入ります白く乾き切った街道を五人の一行(鳴澤君二人平田君二人其れに僕)は足も軽く身も軽く大平の方を望んで行きました
橋場で中仙道と別れていよいよ大平街道となります單調な街道を一里程にして妻籠に着きましたらうして卒業生の加藤君にも會ひました眞夏の日は高く上りましてかかんかと照り付きます曲に曲つた大平街道を拾の足は唯無意識に目的地に達せんと努力しましたされど知らぬ私には一里が非常に遠くあります何時着くやら分りません花崗岩の道は石英がきら／＼目を射て一層暑く感じます圓太郎馬車が砂塵を上げて通り過ぎると目も口も身体も眞白く砂塵にメツキをされるのです
夏は苦しや旅の空
憂はわが身に積りきて
ツツクカバンが重い晝
大平峠を越えに行けば
熱き涙が流れきぬ
山脈晴る、夏の日に

朝の高音を耳にして
道に胡瓜を羨めば
夢かや遠く白雲の
峠の峯を流れ行く

やがて笠で名高い蘭に出ます強烈なる夏の日は陽炎となりてぐる／＼上ります汗ば拭ても拭ても止りませんあゝ身を横たふべき青葉の蔭はないか知らと見渡せば峯の林で朝が高くじいと森の翠線に觸れたるメロイデイを傳へます
ゆかり君！地獄に佛とはこの事でしょう蘭より半里程にして小原君の家にて茶を御馳走になりました實に一杯の茶味、價千金なりです勢付たる足は非常なスピードを以て拾一時半頃大山の花屋に着きました空腹に飯、たんせきに淺田館、何も淺田館の廣告をするのではありませんが實際空腹に飯です拾五錢の晝飯は優に我等の空腹を癒すに十分でした此所からは急勾配の坂です晝畫の拾二時に爪先上りの舊道を四つの身体は何事も語らず呼吸せはしく上つて行きます四方は芝原で晝畫の日に照されて葉をくるくると巻てすうと立て居るのが如何にも哀ですこの舊道を七八町行くと又茶屋がありますあゝ愉快人の生活中此様な愉快が又と有りませうか涼しい峠の風が吹いて来て熱した面をなでて行きますとじじとひぐらしの聲が聞えて来ますうして今来た道は目の下に一直線に赤褐色の筋を引た様です緑の芝

原に白く見ゆるのが新道です遙右にも見ゆるかと思へば左にも見えませぬ此所迄は一里とか桂よりは老木が暗き迄茂れる中を舊道は進んで行きます強烈なる夏の日も此の森の中迄は入りませぬ道脇の木の下で一睡しますと樂しきパラダイスに身は引き入れられて苦しみ夏の旅とは思はれませぬ
ゆかり君！
やがて二時には大平街道の石標の下に辿り付きました之よりは下りです落葉松の茂れる山を右に見て黒川に沿うて大平に入り之より又一峠疲れたる足は幾度も休んで峠の茶屋に着きました遠く赤石の連山は小なる人間よこの大なる山の雄姿を仰げ……とばかり其高低線を北へ北へと遠く霞める八ツヶ岳まで走らせて居ります
國境の連山高し夏の雲
飯田は目睫に迫つて居ります赤い夕日が前の山に照り映れて白い新道がうねうねと飯田の町に續いて居ります
伊那第一の都！元結と大宰先生で名高い都！旅の若人は御前の名を慕ふて今日のはるる拾里の峠を越えて會ひに来たのだよ……
ゆかり君！赤い飯田の電燈の下に一行の影を現はすのも今すぐです。さらば
—四、八、十一—

小品四篇

故郷の夏 伊藤俊夫

周圍を悉く包んだ青葉は、我樂しい故郷一ぱいに涼味ある風を心地よく漂はして居る。淡い霞のこめた朝には悠長な馬の鈴音が馬たひの歌の聲と合して露深い裏道にかすかに聞ゆる。

白雲のフハリと浮いた晝の頃は、風雅な岩にあたつて、碧い水が白く砕ける前川の右方には煙草を片手に吹かせて鮎釣りする人が見ゆる。

夜の籬に薫る夕顔を眺めて椽先で一家團樂樂しい話に耽る時、東の空には天の川が長く白く見えて風鈴の音が涼しく響いて實に心地がよいこれが我が村の宵の常である。

青々とした田には二三日前の雨にて稻は今勢よく延びて居る。

夏の森林

夏の森林は實に深くとざしてゐる。翠の滴る様な檜、杉などの青い葉には燃る様な午後の日が映へて眩く煌いて居る。軟い風が吹いて来ると緑葉が白く閃いて揺ぐ。

緑の濃い青々とした葉を透して空は何處までも紺碧だ。
小さい清き流が淋しい夏の歌をうたひながら流れ行く、奥で木伐りがはたまつた、コンコンと斧の音が響いて来ると又一方では

木を切る鋸の音がし出した。
晝畫のむさるゝ様な時であるが此の處は恰で別世界の様で木々の間をくゞつて吹く涼風は心地よく頬をなでて何事を語るかの様に名も知らぬ小鳥が鳴いて居る。
自分は仙人の様に一人此の奥深い森林に暮して居る様な氣がした。

町の夕涼み

日が暮れると、蚊がブンブンと遠慮なしにおしよせて来て、所嫌はずせめるので、とてもやりきれん、外へ出た。
外は家の中に居る様でない實に陽氣なものである。

向側にアイスクリームと色々の彩色して書いたキャンパンが夕風にゆられて居る、同トく左側に氷ラムネ、サイダーなどと赤く書いた提灯が涼しううに見える。

自分はあまり暑苦しいので其氷店に入つて前にある涼臺に腰を下した、やがて氷をもつて来た、僕はそれを飲みつゝ、外の方に目をそゝいだ。

若い男が手にステッキをつきながら小供を連れブラ／＼と通る又きれいな涼しい様な白地の浴衣を着た婦人が通る。

仕事をすまして法被をきたまゝの人もあるこんな風に人は刻一刻と晝の暑さをわすれんため涼みに出るのが多くなつて来る、このにぎやかな人通も少したつと又だんだん減つて来るのである。

氷店の支拂をすまして店を出た。
ううして歸る途中に此の氷店も、もう十日もたてば無くなるのだと思ひ出すと何んと無く淋しい様な氣が頭の中に浮んで来た。
(八月五日夜)

深緑

緑の廣い原を縫うて曲りくねつた一條の小道を峰の方へと自分は辿つて行つた。道端の青々した草木は朝の清い涼しい風に吹かれてみな蘇生つてゐる。

急に道が坂になつて、緑深い林の中に這入つた自分は此の林中に充滿してゐる濃緑色の清い空氣を深く深く胸中に吸ひこんで見た、しばらくたつて大きな檜の木蔭に草を敷いて休んだ見渡す限り青々した田畑は緑の波を漂はせ其の中に散在して居る人家には煙が靡き杉檜でこんもりした村社等が墨繪の如く浮んで居る。

村の人々は此の中に平和なる樂しい生活をしてゐるのだ。
私は恍惚として眺め入つた。(八月七日)

歸郷の記

横井正風

長い間の夏季實習も七月二十八日を以つて一段落をつけ待ちに／＼たる御嶽登山も北村先生島内先生引率のもとに首尾よく終へ

て愈々八月一日より籠の鳥も放たれる事になつた我等の喜は一通りではないことに家をたつてから一百有余日目に故郷の人となる事が出来ると思へば何となく心がさわさわする登山終へて歸舍したのは七月三十一日は斜陽の裏に向背をなし水は迅瀬の間に回流をなす歸宅の準備はもう整つたなんとなく嬉しうやうやかなしいやうな。夜はしん／＼と更け行きて虫のなき聲がちぎれ／＼にきこゆる床についたのは夜の十一時。秀峯峻嶺の間より常になかぬ時鳥さへも一聲二聲我々の歸郷の名譽りをないてくれた二十一夜の月はやわらかい光を窓の硝子にてらし黒川の水は潺々として奇崑の間を流れ自然の琴を弾じて居る。夢か將まほろしか廊下の方より「もよなきないかれ」と静かな口調でよびおこしてくる人があるつと床をおき上つて見れば僕の常に仲のよい伊藤俊夫君であつた隣りに寝て居た梶田君はもうおきてぼつ／＼荷物のとりしらべをやつて居る炊事の婆さんは「早くねきな」と汽車にのりおくれまますよ」と廊下をあらちちら呼んで歩く朝飯もすんで舍を後に立つたのは午前四時であつた。これで五時五十何分の汽車に間にあふかと氣をもんでゐるものさへあつた天氣は日本晴で東の空はや／＼紅を呈し霧は高い山の頂のみをスースーとさへぎつて居る福嶋の町はまだごこ一軒もたきてゐない常に淋しい人出の少

ぬ、愈々確水時にかゝれば傍の人驚いて曰く「傾斜十分の一なり」と
隧道の多き事も亦驚くに堪へたり入りしかと思へば出で出でしかと見れば入る宛ら嘗て聞きし瀬戸内海に於ける島のその如き想あり、空は曇りに曇りたればかの音に聞けし確水の奇峯は望むべくもあらず一行が遺憾とせる所なりき

車は漸くに輕井澤に入る機關車も亦もとの如く換へられぬ、十二時御代田着車を棄て壹里有半の路を淺間山麓なる白澤林學博士の間伐試験地に取れば稍恢復したる天候は初夏の輝を急げる一行が頭上に投げて淋漓たる流汗歩と共に加はりぬ。
試験地參觀を了りて二時發の列車にて再び車上の人となりたる一行は五時少しく廻りたる頃疲れたる體を逆旅の樓上に委する事を得たり。

夜は例の如く隨意外出を許さる

五月二十三日 (第十日) 松島 長二

六時最終の旅の夢破れ臥床を離る豫定の出發時までは未だ間ありとて各がじし長野の町をば散歩す九時宿に歸り更に縣廳を訪れ卒業生諸君の懇なる案内にて彼處此處巡覽し十二時三十分停車場に戻り木曾福嶋の汽車に投ず一同は或は「夕の六時には」旅行も今日限り「汽車上進行緩なれ」など異口同音に如何にも一句の旅の短かかりし

様に稱ふもをかし然し汽車は何氣なく鮮綠満目の平野の上を或は山色蒼鬱として綠深き中を蔭進するの間まゝ桑摘む乙女子の愛らしき聲に歌ふを聞けば
「蠶上れば御前をつれて花の善光寺へ衣裳買に」
「蠶飼つたり桑摘みしたり主に木綿は着せられぬ」

等乙女子等の生氣野に満ち岡に溢るげに信州は蠶業の盛なる國なるを覺えしむ。
四五の驛も暫時にして過ぎ早、姥捨驛に着す此處は親月の勝地として古くより世に知られたる所車窓より眺むれば眼下に親月堂あり。或は姥捨岩と名づくる巨巖の屹立するあり又眼前には美はしき鏡臺山のぞみ北には川中島の平野遠く連り千曲の清流帯の如く流るゝを見る月夜の眺望さこそと思はる彼の田毎の月の名所も此驛の直下にあり。芭蕉の句に曰く
「俣や姥二人泣く月の友」
と、昔語りなど思ひ出でては印象うたゝ深かりき。

姥捨驛も後に見て間もなく本邦第二位の長隧道として其名を知られたる冠着隧道も過ぎ車窓に凭り東川山村地の荒廢及潮澤地ニ状態或は鍋山砂防工等を眺め先生の説明を聞きつゝあるうち汽車は松本驛に到着す市中目を惹くものは巍々として天表に聳ゆる松本城なり松本より南二里にして松樹打

短歌

百合の花 柘植華村

夏の野の清水がもとに咲きいでよすいしく
句ふ百合の花
繁りあふ青葉をわけてわたらざつ瀧のしぶきに百合の花ゆらぐ
さらさらと白金の玉ち散りぬ霧ふる朝に
白百合折れば
鯛の聲もたれたる野の夕音なく落ちぬあかさいちこは

そよ風に栗の花ちる畔道をいちこ取りつゝ行く乙女かな
黄昏の雲をうかべて行く河の河下遠く宮の山見ゆ
○ 横井正風
山里は只淋しさにたがれて静かに山の鳴

る音をきく
夕風に岐阜提灯の影ゆれて庭にま白しゆふがほの花
○ 梶田笑山
かへりゆく友見送りて涙しぬ只しばらくの別れなれども
うちつづく青田に風もたははてゝ空にはびこる雲之峯かな

雑報

學校記事

○宮川教諭視察 宮川教諭は本縣中等學校教員の舞鶴鎮守府視察團に参加し七月廿二日出發舞鶴に赴き府内に宿泊鎮守府の組織を始めとして軍艦内の設備各機關の構造兵員の訓練に至る迄詳細の視察を遂げ三十日歸校せり

○華頂伏見二若宮殿下御成 華頂宮博忠伏見宮博信兩王子殿下には豫て上諏訪に御來遊中の處七月廿三日驟かに御來蘇に御催しあり午前九時停車場御着暫時岩屋旅館に御休憩の後本會支局を御訪問あり夫より本校に御成遊ばされ七宮校長の御案内にて標本室など御覽あり約半時間許にして御退出相成たるが校長室に暫時御休憩中 今上陛下の宸筆に成れる額面の文字に御目を止めさせられ如何にして陛下の御宸筆を得たるか

この御下問ありし由洩れ承はる

○七宮校長出張 七宮校長は新潟縣山林大會に出席の爲七月廿四日出發新潟を経て會場なる佐渡郡相川町に渡り參會歸途同縣加茂農林學校を視察して三十一日歸校

○御嶽駒ヶ岳登山 一年生は二十九日北村島内兩教諭引率御嶽へ二年生は三十日福山教諭中田助手引率駒ヶ岳へ夫々登山せるが三十一日無事歸校せり兩日其快晴を缺きしも頂上の展望は可なりにて氣溫暖かりし由例に依て這松其他高山植物數多採集し來れり

○終業式 七月廿一日午前十一時講堂に於て修業式を舉行せり前記の通り本年は實習の終りに於て登山をなし山に於て夫々解散せし爲一二年生にして歸郷に都合よき者は登山を済して直ちに歸省の途に上り歸校せしものは極めて少數なりき故に之等と第三年生に對し簡單なる修業式を挙げたるが何となく寂寥の感と興へたり

○慰勞休暇 今夏は例年に比し氣温甚だ高く九十度を超ゆる事も珍らしからず野外實習には頗る困難せるが幸ひに少數の脚氣患者を出せしものにて大体に於て健全無事實習を了したるは欣ぶべし即ち豫定の通り八月二日より同廿一日迄慰勞休暇をなすことなれり

會員消則

七月二十二日新潟市に於ける林業講習會に出席せる高樋、宇佐美、辻の三氏より本會に宛てたる繪葉書通信左の如し

○北國空に見る好日和に九十六七度の乾き切つたる空氣に襲はれつゝ新潟師範學校の講堂に二百名の會員と共に名家の御演説を聞き居り候會合せる同窓生は地元の宇佐美君石川縣の辻敬二君に候何れも十年振の對面に爺顔を褒めかはし候一高樋善光寺山人
○林野講習も本日が最も膏の乗つた時に有之候、高樋辻兩兄と共に曾山の山の人とを語り候へ共未だ盡きざる間に野生は佐渡に渡り申候七宮校長の御來遊を期し親しく御面語の上諸君への御土産話をも御願致度考に有之候一宇佐美ロングポール

○東西に袂を分ちてより一昔の今日北越の首都に於て篤學敏腕の士高樋、宇佐美兩兄と會す共に膝を交へて岐蘇の昔を語り今昔の感一入なり一辻養子守

會員移動

○安藤晃、竹原久治兩君は青森大林區署に赴任せり
○松澤莊太郎君は上水内郡林業技手に轉任せり
○遠藤治一郎君は新潟縣林業技手に轉任せり

○小石彌三郎君は東京大林區喜多方小林區署に轉任

○前田正義君は山梨縣北都留郡役所に轉任
○本會宛暑中見舞を寄せられたる諸兄左の如し謹で謝意を表す

服部啓次郎君

前田正義君

上田彌太郎君

齋藤海藏君

荻原惠治君

○赴任の途次其他を以て最近に本校を訪はれたる卒業生諸兄左の如し

宮澤清輔君

伊藤正之助君

都竹武次郎君

倉科浦一郎君

杉本貢君

中田辰雄君

北村竹次郎君

安藤前校長謝恩金 醸出者諸彦に謹告

安藤前校長に對する謝恩金は七月末を以て締切り總額九拾參圓六拾錢也は爲替とし別に醸出者諸君の芳名を録したる一冊を添へ八月一日安藤先生宛て送付せし所超わて五日先生より左記謝辭を寄せられたれば併せ録して諸君に謹告す因に記念品としては豫

て金時計を贈呈する計畫なりしも便宜上失禮ながら現金にて贈呈することゝせり是亦御諒恕を乞ふ

謝辭

謹啓時下炎暑峻兼候處先づ以て各位御清榮之段奉賀候

却説今回小生に對し多數有志各位の御寄附に依り木會山林學校在職中の謝恩金として多額の金員御惠贈に預り御厚意の段深謝の至りに存候抑も小生の職を山林學校に奉するや其期間極めて短日月にして校運發展上何等盡力も致兼ね却て各位に御心配相かけ候事不尠常に恐縮に不堪自ら耻入居候次第なるに斯く御高配に接し候事誠に意外に存候然し折角皆様の御芳志に候へば難有頂戴致し御厚意を空しくせざる爲め常に身邊に備ふる品を求め永く記念として重寶可致候、尙午陰母校の發展に力を添へ併せて各位の御繁榮を祈る次第に御座候茲に乍略儀紙上を以て御禮旁御挨拶申上度如此に御座候 敬具

八月五日

長野市狐池 安藤時雄

木會山林學謝恩金寄贈各位
校校友會

林友代領收報告

一金壹圓五十錢 松上三郎君

紹介

○竹林經營の要訣(長野縣技師林學士安藤時雄先生著)該書は竹を研究して造詣最も深き前本校長たり安藤先生の近著にして篇を奨勵の卷、經營の卷、生産の卷に分ち生産の卷を更に栽培、保護、利用の各部に分ち詳論せり誠に有用の書と稱すべく農村に向て好箇の參考書たるを失はず自序に依れば御即位記念事業として各地方に竹林の造植をなさしめんとする計畫にして其着意は天皇即位の大禮に用ひ給ふ黄龍染の御袍に竹の御摸樣あるに因みたるものなりと云ふ眞に機宜に適したる計畫といふべし卷頭には岡本山林局長の序あり(發行所東京日本橋區鐵砲町、六盟館、定價五十五錢)

大正四年八月廿三日印刷
大正四年八月廿五日發行

(定價三錢)

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地

編纂兼發行人 安井正夫

長野市西後町丙二十一番地

印刷者 田中彌助

長野市西后町乙二十一番地

印刷所 長野新聞社活版部

長野縣西筑摩郡福島町二八九番地

發行所 藤澤書店